

夢のつばさプロジェクト

2014年夏キャンプ学生報告書

東日本大震災直後から始まった夢のつばさプロジェクトも4年目に入りました。本年の夏キャンプは新たな試みの企画も取り入れ、充実した4日間となりました。

【実施期間】 2014年8月5日～8日（3泊4日）

【開催地】（株）ブリヂストン保養所奥多摩園（青梅市）

【参加内訳】

子ども：計22名（小学生15名、中学生4名、高校生3名）

学生スタッフ：40名（途中入れ替わりを含む）、社会人スタッフ：9名（同左）

■本キャンプのテーマ

本キャンプでは、大きく2つのテーマを掲げ、準備を進めてきました。

テーマ①

【「好き」を増やす、ワクワク】

この夏キャンプは、夢のつばさの柱のひとつである、「子どもたちの夢の応援」に向けて1歩を踏み出すようなものにしたいと考え、このテーマを設定しました。

子どもたちそれぞれに、このキャンプの4日間の中で、「こういうことをしているときが好き、ワクワクする」と言う瞬間を見つけてほしい、その瞬間が、ゆくゆくはその子の興味関心や、将来の夢につながっていきますように、という想いを込めています。

キャンプ中の企画もこのテーマに沿ったものを意識し、東京都心に出かけて初めての場所を訪れ、今まで見たことのないものを見たり聞いたりすることを取り入れたり、中高生が自分の興味関心や将来について、学生とともに考えるワークショップを取り入れたりしました。

テーマ②

【中高生に、キャンプ行事を企画する体験を】

小学2年生から高校3年生までと、とても幅広い学年の子どもたちが参加している夢のつばさプロジェクトですが、これまでのキャンプの課題として、企画が年齢の低い子どもたち向けになりがちなことや、スタッフが企画一切を準備し、子どもたちに提供する形になっていることが挙げられていました。そこで今回のキャンプでは、キャンプに参加する中高生が、大学生スタッフとともに企画を立て、小学生の楽しめる障害物競走を実行するという新たな試みを行いました。キャンプ前に2回、「プランニングミーティング」として中高生と学生が仙台でミーティングを

行い企画の内容を話し合い、当日は備品のセッティング等を一緒に行いました。

両テーマとも、今までにない新しい試みで、成果も課題もそれぞれ見られました。それらについては、後述の「本キャンプで感じられた成果」「今後の展望」の項目で詳しく報告いたします。まずは、4日間の様子について具体的に報告していきたいと思います。

■4日間の流れ

1日目：

【開会式】

今回のキャンプのテーマ「好きを増やす、ワクワク」を子どもたちに伝えるような動画の上映を行ったあと、アイスブレイクのゲームを行いました。また、前回のキャンプの閉会式で子どもたちに書いてもらった「約束カード」（次のキャンプまでに頑張ることや目標を学生と「約束」するカード）を返し、「約束」が守れたかどうか、和気藹々とした雰囲気の中で学生と確認をしました。長旅に疲れた表情を見せる子どももいましたが、久しぶりに会う学生や子どもたちとの再会にはしゃいでいる子どもたちの笑顔を見て、心が和みました。

2日目：

【障害物競争】

「中高生に、キャンプ行事を企画する体験を」というテーマのもと、中高生と担当学生が協力して、障害物競争を実施しました。レースが終わると、中高生が前の晩にひとつひとつ袋詰めした景品と参加賞が、子どもたちに配られました。その後、水鉄砲やビニールプールを使った水遊びになり、学生も子どもたちも全身ずぶ濡れになって大はしゃぎをしました。炎天下走るということで、テントを張ったり、水分・塩分補給を頻りに呼びかけたりと気を配ったことが功を奏し、熱中症になることもなく、無事終わることができました。



【うるまでるびさんのワークショップ】

アニメ「おしりかじり虫」の作者、うるまさんをゲストとしてお招きし、アニメーションを作るワークショップを実施していただきました。写真をコマ撮りして作成する動画の作り方を教えていただいたあと、子どもたちが各々チームにわかれてストーリーを考え、撮った写真を組み合わせてアニメーションを作りました。それぞれ試行錯誤した様子ですが、チームの個性が豊かに出た動画が完成しました。完成した動画にはうるまさんがBGMや効果音を付けてくださったことにより、さらに面白さの引き出された作品となり、プロの技術のすごさを改めて感じさせられました。上映会のときにはたくさんの歓声や笑い声があがっていました。



【音楽会】

ジャズ演奏家の方3人（ピアノトリオ：中野阿貴さん、林信一郎さん、古谷悠さん）がいらっしゃって、音楽会が催されました。本格的な演奏ながら、「星に願いを」など子どもたちにも聞き覚えのある曲のアレンジもあり、子どもたちも学生もリズムをとりながら聴き入っていました。

また、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」のダンスをみんなで踊るという学生の考えた企画や、おなじみの「つばさをください」の合唱にも対応していただき、ジャズアレンジのされた曲でダンスを踊ったり歌を歌ったり、ゆめのつばさらしさを大切にしつつ一味がったリズム感の加わる音楽会となりました。子どもたちからたくさんの笑顔がこぼれ、楽しい夕べとなりました。



3日目：

小学生チームと中高生チームにわかれ、テーマ「好きを増やす、ワクワク」に即し、

小学生：「見たことのないものを見てワクワクしてもらおう」

中高生：「自分の好きなものが将来につながることを知ってワクワクしてもらおう」

と言う目標のもと、奥多摩園を離れて外出をする企画を行いました。

【外出企画（小学生）】

バスを貸し切って竹橋の「科学技術館」を訪れたあと、浅草を訪れて観光しました。

「科学技術館はたくさんのブースにわかれており、子どもたちは大きなシャボン玉に入ったり人間そっくりなロボットと会話をしたりと、普段はできない体験にワクワクしている様子でした。学生の配布したワークシートの答えを見つけようと熱心に説明を読んでいる子どもたちもいました。

浅草観光では、近くに見えるスカイツリーを写真に収める子ども、食べ歩き代として全員に渡した500円でかき氷やソフトクリームを食べてニコリする子ども、おこづかいで友達やおうちの人にお土産を買う子ども、とそれぞれが楽しんでいる様子でした。

バスガイドさんからの丁寧な案内もいただき、バスの中から東京都心を観光しながら移動できたことも楽しかったようです。

【外出企画（中高生）】

中高生は、電車に乗って東京大学を訪れ大学案内やワークショップを行いました。その後、原宿に移動しての観光となりました。

東京大学では、大学構内を学生が案内したあと、子どもたちの興味・関心や将来について考える企画を行いました。学生自らが大学で学んでいる理由や将来の夢を語ったり、子どもたちの好きなものがどのように将来につなげていける可能性があるかを学生とともに考えるワークショップを行ったりしました。初めての試みで試行錯誤しながら準備を進め、体当たりの企画となりましたが、子どもたちは目を輝かせながら聞き入り、一緒に参加した社会人スタッフからもとてもよかったとの評価をいただきました。「夢の応援」への一歩を踏み出せたのではないかと思います。

原宿では、人ごみの多さに圧倒されつつも、スイーツの食べ放題に行ったり竹下通りでショッピングをしたりと、中高生のみだからこそ可能な楽しみを、満喫したようです。



4日目：

【ブリヂストン社訪問】

4日目の午前中、東京丸の内のブリヂストン本社を訪問しました。学生代表と子ども代表が、取締役会のみなさまに厚いご支援への感謝を申し上げたところ、津谷正明 CEO より「今後もずっと、夢のつばさプロジェクトの支援を続けたい」との言葉をいただき、本当にありがたさが身にしみる思いでした。社員食堂でお昼のお食事をいただき、高層ビルの23階から見える東京の眺めに子どもたちは興味津々の様子でした。

【閉会式】

恒例の、4日間の写真を盛り込んだスライドショーを上映して4日間の思い出に浸ったあと、一緒の部屋で過ごした学生から、手作りのメッセージカードが子どもたちに手渡されました。子どもたちは照れた表情でカードを受け取り、学生といっしょに写真を撮っていました。その後、「4日間で見つけた好きなもの、ワクワクするものをカードに書き、宝箱に入れて持ち帰ろう」という企画を行い、そのあと、前回に引き続き「約束カード」を記入してもらいました。それぞれがこの4日間を振り返り、次のキャンプでの再会を楽しみにしながら、帰っていきました。新幹線で仙台、盛岡、郡山へと送り届けて、キャンプは終了しました。

■本キャンプの成果、今後の展望

◎年長の子どもたちにとっての夢のつばさでの「居場所」を示すことができた。

今までのキャンプでは、小学生から高校生まで同じ企画を実施してきたので、どうしても年齢の小さい子の活動に合わせることになり、年齢の大きい子に居心地の悪い思いをさせているのでは、と感じることがありました。これから中高生も増えていくことを考え、大きな課題となっています。

今回のキャンプでは初めて、中高生が大学生といっしょに企画を作るということや、小学生と中高生を分けて、それぞれにあった企画の実施を試みました。中高生からは、「障害物競走を考えるのがおもしろかった」「中高生だけで行動できる日があって楽しかった」などの声があがっていたようです。さらに、「高校を卒業したら、学生として夢のつばさに参加したい」という子どもも何人もいました。

この「中高生と小学生を分けて行う企画」については、スタッフの反省会で話題となりました。夢のつばさプロジェクトでは、東日本大震災の遺児孤児を支援したいと考えた当初から、年齢を超えた集団で育てあうことを大事にしたいと考えて、小学生から高校生までを対象にして募集し、活動を行ってきました。特に社会人スタッフからは、「小さい子向けの企画だから中高生はつまらない、というのではなく、年長の子が小さい子どもに関わって面倒をみることで、年長の子自身も人間性を高めていけるように、スタッフ側も手助けしていきたい」という意見が出されました。今後も検討を続けていきたいと思えます。

「夢のつばさ」は、今の子どもたちが成長して、高校生になっても、高校を卒業しても、今後

もずっと「戻ってこられる居場所」であり続けてほしいと思っています。どんどん成長していく子どもたちですが、これからはさらに、進路や勉強についての相談に細やかに対応して寄り添っていく必要があると思います。また、中高生が大学生とともに企画をつくるという試みも今後ブラッシュアップして、さらにスタッフ側の達成感やおもしろさを感じてもらえるようにしていく必要があります。また、こうした経験によって、自分が誰かの役に立つよう行動する、年齢の低い子たちのために活動する、という意識を育てることができればと思います。

◎子どもたちの「夢の応援」への一歩を、踏み出すことができた。

「夢の応援」への初めとして「好きを増やす、ワクワク」というテーマを設定し、それを意識した企画を用意してきました。閉会式で書いてもらったカードには、「カメラを撮ること」「(自由時間に部屋で)おばけやしきをする事」など書いてくれた子どももいて、企画の時間のみならず自由時間を通して、のびのびと、好きなものを見つけたようです。広げた興味・関心がどこかで「夢」とつながっていくと良いと思います。

中高生は、進路について具体的に考えるきっかけとなったようで、東京の大学や専門学校に興味を持つ子もいました。

今後も、子どもたちの世界を広げるようなコンテンツを用意するとともに、年齢の大きい子どもたちに対しては、ひとりひとりの希望に応じて相談に乗ったり進路についても考えたりといった細やかな対応をしていきたいと思っています。また、子どもたちと年齢の近い大学生として、身近なロールモデルを示していくことも、夢のつばさだからこそできる「夢の応援」なのではないかと考えています。学生自身がどのようなことを考えて進路を選択し、今どのように夢を持っているのかなど、子どもたちに語る機会をこれからも大切にしていきます。

■最後に

私たちの学年がこのプロジェクトに参加してキャンプを重ねるごとに、子どもたちのリラックスした笑顔が増えており、夢のつばさが子どもたちの心のよりどころになってきていることを、身をもって感じています。また、震災から3年が経った今でも、ふとした瞬間に亡くなった親御さんや家族のことを口にする子どもたちは多く、年月が解決する心の傷ではないこと、このプロジェクトが長期的に続いていくことの大切さを思わされます。

私自身、学生代表を経験したことで、このプロジェクトを支えてくださる方の多さ、ありがたさをさらに強く感じております。ご支援をいただいているみなさまへの感謝を、改めて申し上げます。学生代表は退きますが、これからも夢のつばさの子どもたちと関わり、見守り続けていきます。

今後ともどうぞ、よろしくお願い申し上げます。